

「私どもの中におられる主」

ヨハネによる福音書20章1-18節

森島 牧人 牧師

先回はルカ福音書を通してでしたが、今回はヨハネ福音書を通して主イエスの死の後、どのような出来事があったのかを見ながら、復活の意味を考えて参りたいと思います。

主イエスが息を引き取られたのは金曜日の午後三時頃、間もなく次の日の土曜日（安息日）が始まるという時間でした。処刑された罪人は共同墓地に埋葬されるのが習わしでしたが、主イエスの場合はアリマタヤのヨセフの申し出が認められ、彼の造った新しい墓に慌ただしく入れられることになったのです。その一部始終を見ていたのが、主イエスの十字架の死に立ち会った女性たちでした。彼女たちは愛する師の遺体に亜麻布を巻き直してきちんと埋葬したいと願い、安息日の終わるのを待って主の墓に駆けつけたのです。

当時のユダヤの墓は大きな石灰岩を掘り抜いた横に長いもので、入口には大きな石がはめ込んでありました。入口の大きな石をどうしたものかと思案しながら急いでいた女たちでしたが、墓に着いて見るとそれは既に横に移動されていて、中が見えるようになっていました。驚きながら中を覗くと、主の遺体はどこにも見当たらず、亜麻布が置かれているだけだったのです。女たちの中心であったマグダラのマリアは、主の遺体を誰かが持ち去ったと考え、それを弟子のペトロとヨハネに知らせます。走って来た二人は何が起こったのか分からず、そのまま帰ってしまいましたが、マリアは墓の外に立ったまま泣いていたのです。そこへ主イエスが来られ、「婦人よ、何を泣いているのか。」と声をかけられます。しかしマリアにはそれがイエスだとは分からず、主イエスに、「マリア」と名前を呼ばれて初めて主イエスだと気づき、「ラボニ（先生）」と言って主に取りすがろうとしたと聖書にあります。これが聖書に書かれている復活の最初の証人であるマリアの物語です。

さて、どこでも女性の地位の低い時代、特にそれが顕著であったユダヤでは、最も大切なイエスの復活の最初の証言者が女性であることなど、通常では考えられない驚くべきことです。しかし、筆者のヨハネはこれをそのままを書くことによって、この出来事がいかに特別な出来事であったかを示し、これが人間の出来事ではなく神の業であったことを明らかにしていると思われるのです。

このマリアは、ルカ福音書やヨハネ福音書などでは罪深い女としてさまざまに描かれていますが、しかしそんなマリアが主イエスに出会って変えられ、主の弟子として従って行ったというのは間違いのないところでしょう。男の弟子二人が帰ってしまった後も墓の前で泣いていたマリアに、「なぜ泣いているのか。」と言われる復活の主イエス。マザーテレサに、「愛の反対は憎しみではなく＜無関心＞である。」という言葉がありますが、主イエスも泣いているマリアに、無関心ではおられません。ここでも主の愛を見ることが出来ます。この時の主の「なぜ泣いているのか」という問いには、「もう泣かなくていいよ」という意味があります。今日交読しました詩篇126：5・6には、「涙と共に種を蒔く人は 喜びの歌と共に刈り入れる。種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は 束ねた穂を背負い 喜びの歌をうたいながら帰ってくる。」とあります。

主イエスの十字架の死に絶望し散らされた弟子たちでしたが、復活した主に出会い、また主のお言葉に強められ、彼らは集められ町に出て宣教を始めます。彼らの最初の宣教の言葉は、「あなたがたは、命への導き手である方を殺してしまいましたが、神はこの方を死者の中から復活させてくださいました。わたしたちは、このことの証人です。」（使徒3：15）というものでした。ユダヤ当局を恐れて隠れていた弟子たちが復活の主イエスに出会うことによって変えられ、宣教を止めようとする当局者に「わたしたちは見たこと、聞いたことを話さないではいられない。」と主張する者となって宣教を続けて行ったのです。

この復活の主イエスとの出会いは、単に二千年前の過去の出来事ではない、それは今日の私たちの教会の信仰です。私たちも「なぜ泣いているのか」との主の声を聞き、新しい命に復活しました。死が終わりではなく、死をも突き破って新しい命に生きる。神はそれを私たちに与えてくださいました。現実がどんなに暗くてもそれが終わりではありません。

欧米の教会では主の亡くなられた金曜日のことを Good Friday と呼んでいます。墓穴を覗く日から天を仰いで感謝する日に変えられたからです。復活の主と出会った弟子たちによって主の復活された日曜日は主の日・主を礼拝する日と定められることになりました。その延長線上にいる私たち、日曜日が主の甦られた日を喜ぶ日であることを憶えて、主日礼拝を守って行きたいと思います。